

執筆者紹介

竹内 常一さん 國學院大學文学部教授

長く全国生活指導研究協議会の常任委員会代表、日本教育学会の理事などを歴任し、現在は日本生活指導学会代表理事を務める。少年期・思春期・青年期のさまざまな問題を、身体論、関係論、価値・文化論から論及してきた。また、一貫して教師を初めとする対人援助の現場のさまざまな実践家との共同研究を進め、研究と実践の統合を図ってきた。

著書「子どもの自分くずしと自分づくり」（東京大学出版会）、「少年期不在—子どものからだの声をきく」（青木書店）など多数。

石澤 雅雄さん 京都市立祥豊小学校教諭

小学校教員生活30余年。京都市つづり方の会会員。日本作文の会会員。子どもの詩や作文を読むのが毎日の楽しみであり、どんな赤ペンを入れて一枚文集にしようかなど考えるのもまた楽しみ。誰もがみな、それぞれの思いを自由に表現し、理解し合えたら、どんなにすばらしい社会になるだろうかと夢見て、生活綴方の仕事を続けている。

池添 素さん らく相談室室長

京都市職員として、保育・児童福祉分野の事業に長年関わった後、1994年に「らく相談室」を開設し、地域で幼児期・少年期の子育て支援を始める。立命館大学、佛教大学などの非常勤講師を務めながら、京都市保育連盟障害児保育巡回相談員としても活動している。

著書「ちょっと気になる子どもと子育て—子どものサインに気づいて」、「いつからでもやり直せる子育て」（かもがわ出版）など多数。

高垣 忠一郎さん 立命館大学応用人間科学研究科・産業社会学部教授

不登校の子どもを抱える親の会に長年関わり、「自己肯定感」をキーワードにしながら、大人は「思春期」の子どもたちの成長をどのように支援していけばいいのか発言を続けてきた。病院でのカウンセリングも行いながら、最近では、支援する「思秋期」の大人の「自己肯定感」についても論及を広げている。

著書「生きることと自己肯定感」（新日本出版）、「不登校支援ネットワーク」（かもがわ出版・共編著）など多数。

坂本 則子さん 宇治市立東宇治中学校教諭

わが子の登校拒否と向き合って10年、今は宇治市立東宇治中学校の教育相談担当者・不登校加配としてわくわくするような毎日を過ごしている。多くの人たちと連携しながら、不登校・相談室登校の子どもたちとかかわり、スクールカウンセラーとのコーディネーター役も勤めている。地域では「親の会」にもかかわり続けている。

福井 雅英さん 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科助教授

滋賀県下の公立小学校に5年、中学校に26年勤務し、社会科、生徒指導、教育相談などを担当してきた。2004年度から現職に異動し、戦後教育改革期の教育実践の史的研究、教師の専門的力量の形成、子ども理解を軸にした臨床教育学を主な研究テーマとしている。

著書「臨床教育学序説」（柏書房・共著）、「安心と自由が生きる学校」（かがわ出版・共著）など多数。

遠藤 昌子さん 京都市立伏見工業高等学校養護教諭

養護教諭歴20年余り。現在は京都の定時制高校に勤務中。『保健室は「空気がやさしい」「学校でホッとする場所」「落ち着くなー」』という生徒たちの言葉を励みに今日もがんばっている。今は大変生き難い世の中、生徒たちの中には先が見えなくなったり、希望を失いかけていたりしていることもよくある。本格的に社会に出るまであと少し、「保健室に出会えて良かったな」と思えるメッセージを伝えたいと思っている。

村本 邦子さん 立命館大学応用人間科学研究科教授

精神科クリニック思春期外来に3年間勤め、自身も子どもを持ったことをきっかけに、1990年、女性ライフサイクル研究所を設立。以来、女性と子どもの臨床に携わる。他者と出会い、世界と出会う自分探しを支援したいと考えている。現在、2人の子どもたちは思春期に。

著書「援助者のための女性学入門」（三学出版）、「『しあわせ家族』という嘘一娘が父を語る時」（創元社）など多数。